

身体表現における “共振する身体”へのプロセスⅡ

東洋英和女学院大学 西 洋子
東洋英和女学院大学 野口晴子
神戸大学 柴真理子

1. 研究目的

私たちの身体は、例えば乳児と母親が言葉をこえた世界で共に揺れあうような、原初的な身体共同性を基底としながら、他者身体との間に様々な同調や共鳴、共振をつくりだしている。また、身体相互のかかわりの中で生じる“共振”という事象を通して、間身体的、間主観的な感覚が生じ、そのことで他者への共感や理解は深化するとされている。本研究は、ひとの身体のこのようなあり方を踏まえ、以下の2つを目的とする。

1. 共振の感覚を、教育的・療法的援助のもとに意図的に発現させることは可能かどうかを、身体表現活動のフィールドで検証する。
2. どのような心理的機序によって共振へと至るのかをより多くの人々を対象とする定量的な研究方法を用いて検討し、実証的な視座から共振の発現プロセスのモデル作成を試みる。

II. 研究方法

1. 活動方法

二人組になり、左右どちらか片方の手を合わせた状態から以下の3つの条件で、各々約3分間共同で動く。手は途中で変えても構わないし、二人の身体が離れた状態で動いても構わないこととする。

①一方から動きを送り（リーダーとなる）、他方はそれを受けながら動く②リーダーを交代して動く③リーダーを決めないで動く

2. 心理的機序の検討

(1) 質問紙の作成

2000年度に行った身体表現活動での共振の発現プロセスに関する実験で収集した質的なデータ（活動者の感想の自由記述）を分析し、その結果をもとに15の質問項目を作成し、5段階の評定尺度を設けた。

(2) 調査対象者

成人男女261名（男性20名・女性241名）

(3) 調査期間 2001年5月～8月

(4) 分析対象

活動方法①～③で得たデータのうち「③リーダーを決めないで動く」のデータを分析の対象とした。

(5) 分析方法

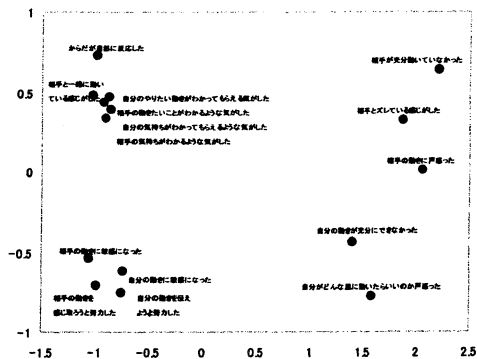
(5)-① SPSS-Base10.0による階層クラスター分析と多次元尺度法を用いて、相互に類似した変数を分類した(5)-②多次元尺度法により最も距離の遠かった2変数と残りの変数との距離を0から

1の範囲で標準化し、それぞれX軸Y軸に置き、線形回帰によって傾向を推定した。

III. 結果及び考察

共振の発現にかかわる質問項目への回答や、活動後の自由記述を検討すると、多くの対象者は、本研究で設定した活動方法を通して、相手の動きと自分の動きが一体化するような間身体的な感覚や、相互に意図が伝わるような間主観的な感覚を得ていることが示唆された。その際、共振へといたるプロセスについては、以下に、①多次元尺度法によるユークリッド距離モデル及び、①を2変数からの距離で標準化した②共振の発現プロセスのモデルを提示する。ここから明らかなように、共振の発現プロセスは、自分の動き方へのとまどいからはじまり、ズレの感受の後に能動性と受動性の交錯を経て、からだが自然に反応するような感覚へといたることが立証された。なお、本研究の分析で用いた階層クラスター分析と①の多次元尺度法による距離モデルは、相互に補完的な分析方法とされているものである。今回の結果では、両社に同一の傾向がみられたことから、この分析結果は強い論証を得たと考えることができる。

①ユークリッド距離モデル



②身体表現活動における共振の発現プロセス

